

学生の農業体験がキャリア形成に与える影響

— 自由記述回答の計量テキスト分析を手がかりとして —

Impact of Student Farming Experiences on Career Development

— Based on Econometric Text Analysis of Open-ended Responses —

手塚 貴子

Takako TEZUKA

1. 問題の所在と研究の背景

学校教育の進路指導の中に「キャリア」や「キャリア教育」の文言が登場したのは、2011年1月、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」が示されて以降である。小・中学校や高等学校だけでなく、全国の大学や短期大学においてキャリアガイダンスが義務づけられ、キャリア教育の基本的指針が示されるようになった。しかし、学校から社会への移行をめぐる課題として、新規学卒者に対する求人の減少や求職希望と求人希望との不適合の拡大、勤労観や職業観の未熟さ、職業人としての基礎的資質・能力の低下等を挙げている⁽¹⁾。また、若者の意識に関する要因では、身体的な早熟傾向に比して、精神的・社会的自立が遅れる傾向、生産活動や社会性における未熟さ、若者が職業を考えたり、職業の選択・決定を先送りにするモラトリアム傾向の高まり、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加等⁽²⁾などがある。成年年齢引き下げが施行された現在、法的な施行と若者のキャリア形成に関わる実態との乖離が益々開いていくことが懸念される。学校教育ではこれまでの十年で活発にキャリア教育における授業案が実践されてきているが、高等学校を卒業後、高等教育機関へつながるプログラムの実践事例はあまり報告されていない。

大学・短期大学におけるキャリアプログラムでは、インターンシップに参加することが何よりの近道であるが、学生自らが主体的に取り組むかどうかは、議論の余地がある。森山らの調査報告（2018）によると、インターンシップを単位認定している短期大学83.4%⁽³⁾であり、学生自らが自分の適性を想定してインターンシップ先を探していくよりも、教職員側がインターンシップ先である企業・団体等の確保をし、学生の実習先を確保することが必要になってくる。そのため、森山らは「各大学・短期大学における喫緊の課題は、この協力企業・団体の開拓と強い連携に向けての全学的システムづくりであり、その構築のためには、教職員一体となった取組が必要である⁽⁴⁾」と指摘する。しかし、学生のために、大学側がインターンシップ先を確保することがキャリア教育において最も重要な方法なのだろうか。例えば、松本らの報告（2017）では、郷土料理に接する経験が女子短大生の思考や行動に与える影響を、自尊感情とキャリア形成に視点をあてて調査し、郷土料理の伝

承は大切だと感じていること、家族に作ってあげたいと思っていることは、目標喪失感や停滞感が低められる傾向にあること、家庭の食事や食文化を学ぶことで、新たな自分の発見と学んでいることに誇りを感じ、自分の個性に役立てるような価値を見出し（中略）、そして、人や社会とのかかわり、授業内容と希望する職業との関連が実感できることにより内発的動機が高まり、将来の目標、就職活動に対してもよい影響を与える⁽⁵⁾ことを指摘した。また、寺田らの報告（2015）では、日本・アメリカ・韓国・ドイツの4大生と短大・職大生を国際比較研究したところ、日本の学生は、アルバイトをしているにもかかわらず、仕事への動機が弱い⁽⁶⁾ことを明らかにした。こうした結果から鑑みると、専門学習やインターンシップといった職業観に直結する学び以外の学習プログラムでも、キャリア形成に大きく寄与する可能性があると考えられる。自己開示性が高まり、自己肯定感や目標達成感を感じることのできる体験学習は、義務教育や高等学校までの学校教育に限らず、高等教育機関でも教育効果が図れるのではないかと考える。

そこで、高等学校までに取り組まれてきたキャリア教育を大学・短期大学へとつなげる学習プログラムの一つとして、大学・短期大学でも農業体験を取り入れることを提起する。農業体験は、小・中学校や高等学校でも取り入れているキャリア教育プログラム事例が多数⁽⁷⁾あるが、大学・短期大学生に農業体験を取り入れる理由にはいくつかの背景がある。一つには、生活の消費主義化が進行していく中で、共同にものをつくる体験は、子どもや若者に人間が生存するために絶対的に必要な労働の意味を教え、新しいものをつくり出す文化的存在としての人間の価値を感じ取らせてくれる⁽⁸⁾。二つには、若者らが大学や短期大学を卒業後、地域社会の主体的な担い手として、地域づくりの原点を捉えることができる。三つには、持続可能な社会を目指す、SDGsの取組みにおける基本的モデルケースとして、農業を体験することで作業中に出てくる廃棄物やCO2s削減の視点を構築させることができる。そして何よりも、どのような職業に就くかは一人ひとり異なるが、食は人間の営みとして誰もが必要不可欠である。少子高齢化が進行する中で、健康寿命の延伸や生活習慣病の予防が引き続き国民的課題であり、それらを改善するため、生産者等と消費者との交流や都市と農山漁村の共生・対流等を進め、消費者と生産者等の信頼関係を構築し、我が国の食料需給の状況への理解を深め、持続可能な社会を実現していくことが必要である⁽⁹⁾。

2. 研究の目的

本研究では、学生を対象とした農業体験の学習プログラムが、彼らのキャリア形成に影響を与える可能性を実証研究によって明らかにする。研究期間は、2021年10月および2022年10月とした。学校教育現場で実践例の多い稲作を参照しながら、学生用のオリジナルプログラムとして、加賀蓮根の農業体験を取り入れることとした。加賀蓮根は、地域ならではの食材でありながら体験事例の少ない品目であり、体験を通じて学生の勤労観や職業観等キャリア形成に影響を与えるかどうか分析することとした。

3. 研究の方法

本研究では、石川県金沢市A大学短期大学部経営実務科地域課題解決・社会教育ゼミナールに所属する1, 2年生のうち、農業体験（蓮根の鍬掘り収穫体験）の学外活動に有志で参加した学生を対象とし、2021年10月および2022年10月の農業体験後の自由記述回答内容を中心に分析した。分析方法については、KH-Koderによる計量テキスト分析を行い、抽出語リストおよび共起ネットワーク図を用い、キーワード毎の関連性を分析した。尚、対象となる学生に対し、調査研究を目的とした体験及び事後のアンケートであることの主旨を説明し、承諾を得た学生データのみを採用した。

4. 研究の結果

(1) 回答者の属性

回答者の属性については、表1の通りである。2021年は1年生16名、2年生6名の計22名、そのうち金沢市内出身者は31.8% (n=7)、それ以外は68.2% (n=15)、蓮根農業体験の経験有は1名のみ、それ以外は皆経験無 ((n=21) であった。2022年は1年生15名、2年生10名、そのうち金沢市内出身者は40.0% (n=10)、それ以外は60.0% (n=15)、蓮根農業体験の経験有は、32.0% (n=8)、それ以外は68.0% (n=17) である。2021年の経験有学生1名は、蓮根栽培地域の小学校で経験していたとのことである。2022年の経験有

表1 回答者の属性

	2021	2022
1年生	16 (72.7)	15 (60.0)
2年生	6 (27.3)	10 (40.0)
金沢市内	7 (31.8)	10 (40.0)
金沢市外及び県外	15 (68.2)	15 (60.0)
経験有	1 (4.5)	8 (32.0)
経験無	21 (95.5)	17 (68.0)
計	22	25

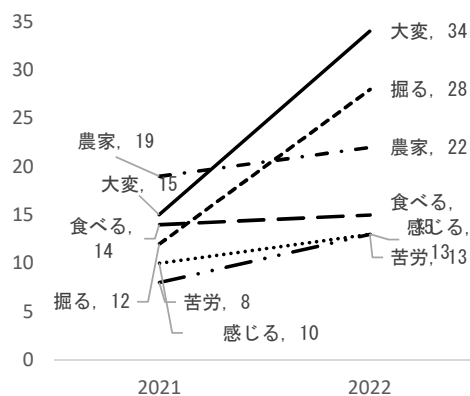


図1 抽出語年次比較

表2 自由記述回答における抽出語一覧

2021		2022	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
農家	19	大変	34
加賀	15	掘る	28
大変	15	農家	22
食べる	14	食べる	15
知る	14	感じる	14
感じる	12	苦勞	13
掘る	12	深い	11
初めて	10	経験	10
泥	9	今回	10
苦勞	8	出来る	10
今回	8	人	9
出来る	8	折れる	9
想像	8	知る	9
感謝	7	泥	9
経験	7	感謝	8
美味しい	7	作業	8
力	7	体力	8
活動	6	頑張る	7
嬉しい	6	考える	7
貴重	6	今年	7

表 3 「感じる」の具体的記述一覧

番号	2021 「感じる」記述内容	2021 「感じる」記述内容
1	私の世界が大きく広がったことを感じた	生産者たちの取り組みや収穫に対する苦労や熱意をより感じる事ができた
2	スーパーで買ったものよりも数倍美味しく感じた	蓮根を売り、買って頂けたり喜んで頂けたりすることの喜びをより深く考えることができた
3	是非また体験したいと感じた	去年はつらいや大変だと感じたただだったが、今年はその辛さも楽しいと感じることができた
4	大変だったが、達成感と感謝を感じる良い経験になった	コツを掴み、綺麗な蓮根をたくさん収穫でき、とても良い思い出になったのではないかと感じた
5	初めて蓮根掘りの体験をし、蓮根はとても手のかかっている食材だと感じた	自分自身の成長を感じる事ができた
6	非常にいい経験ができたと感じた	初めての経験で思ったように簡単には掘れないなと感じた
7	私たちは美味しい蓮根を食べられることに感謝しなくてはならないと感じた	すごく過酷に感じた
8	真心を込めて作られているものなのだと感じた	蓮根が取れた時の達成感があって、すごくやりがいを感じた。
9	先輩方と一緒に活動することで沢山の学びがあり、自分も成長したいと感じた	
10	自分達で掘った蓮根だからかより美味しさを感じられた	大変な作業を繰り返し、採り続け、私たち消費者の元へ届けてくださっているということに気づき、もっと感謝するべきだと感じた
11		このような体験ができて、私たちは恵まれていると感じた
12		農家さんの苦労を深く感じた
13		農家さんの苦労がないと、私たちは蓮根以外の食べ物も食べることができてないのだと感じた

学生 8 名は、昨年度の農業体験で初めて参加し、2 度目となる。昨年度初めて体験し、蓮根掘り体験をもう一度取り組んでみたいとのことで、今回も引き続き参加した。

(2) 自由記述回答における抽出語キーワード

蓮根の農業体験を実施後、学生からの自由記述回答を得て、集計した回答を、KH-Coderによる計量テキスト分析を行い、抽出語リストの出現回数順に表 2⁽¹⁰⁾に示した。

2021年、2022年とも共通して出現回数の多いのは、「農家」、「大変」、「食べる」、「感じる」、「掘る」、「苦労」であった。また、これら 6 語を年次比較し、図 1 に示した。

動作そのものを示す「掘る」「食べる」以外に、動作に対する感情を示す「大変」が最も多い語であった。また、具体的な名詞である「農家」の語も多かった。さらに、プラスイメージにもマイナスイメージにも捉えられる「感じる」が多かったので、「感じる」の用語が登場してきた箇所の具体的記述内容を表 3 に示した。

2021年の「感じる」表現は、前向きな記述が目立つ。特に、キャリア形成における視点でみると、「農業従事者になりたい、就きたい」という意志はないものの、自己の成長を肌で感じる視野（世界）の広がりや自己の成長、向上意欲などの肯定的な表現がみられた。また、2022年では、特に体験が 2 回目という 2 年生は、自己の成長や昨年との感じ方の違いなどにも「去年はつらい、大変に感じたただだったが、今年はその辛さも楽しいと感じることができた」と言及している者もいた。その一方、初めての体験となる 1 年生の中に

は、やりがいを感じる者もいれば、「すごく過酷に感じた」など、自己の予想を超えるマイナスイメージも記述されているのが特徴的であった。

(3) 抽出語どうしの共起ネットワーク分析

次に、自由記述回答の抽出語どうしの関連性をみるため、共起ネットワーク図を図2(2021)、図3(2022)に示した。

2021の抽出語には、1つめのネットワークとして「農家」「知る」「食べる」「苦勞」に大きく強い共起が現れ、「農家」の横には「泥」が、「苦勞」「食べる」「知る」には「力」が、「苦勞」には「必要」が関連していた。また、2つめのネットワークとして、「大変」「掘る」「初めて」「想像」「重労働」の5つの語があり、学生初めてのれんこん農業体験が想像を超えて大変で重労働であった言葉がつながっていた。さらに、3つめのネットワークとして、「人生」「今回」「出来る」「参加」「知識」「身」「楽しい」「皆さん」「感覚」、そして「土」「作業」「足」が分岐されつながりをみせていた。先ほどの「大変」や「重労働」というマイナスイメージとはまた異なる「知識」や「楽しい」などの表現が登場し、プラスイメージも一つの共起ネットワークとして表れていた。それと同様に4つめのネットワークとし

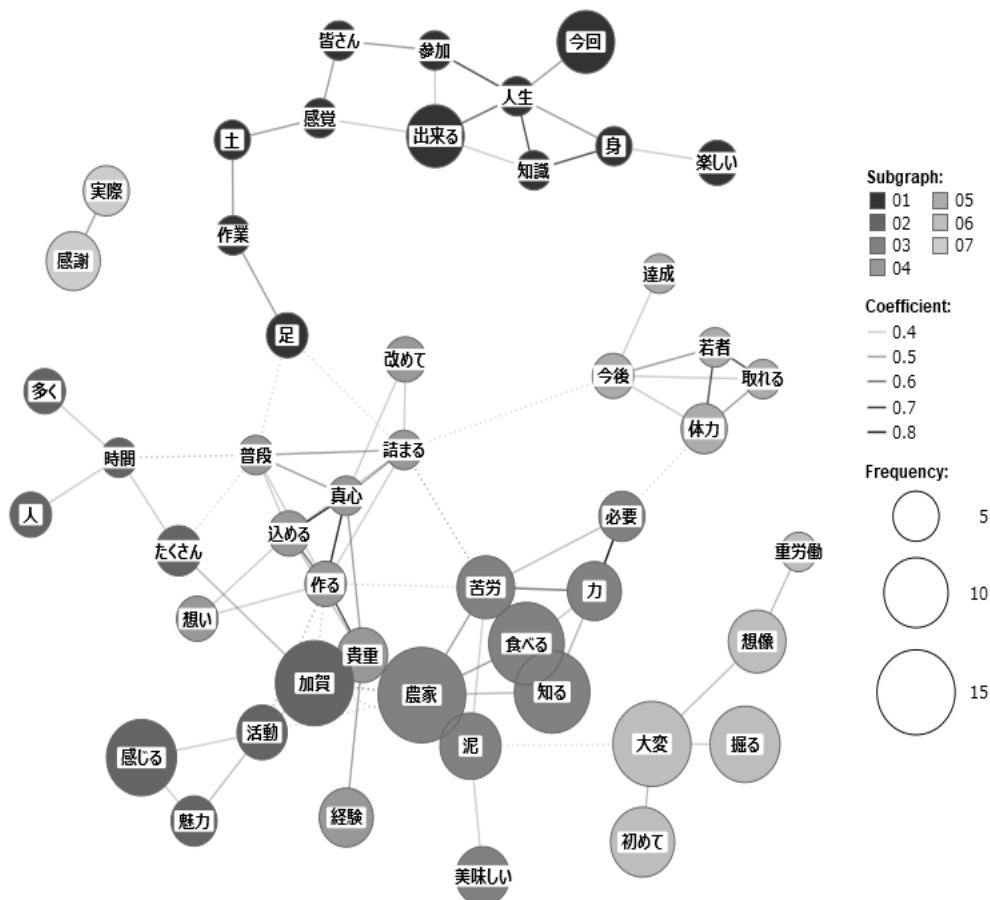


図2 2021 抽出語共起ネットワーク

て「活動」「魅力」「感じる」の3つの語が共起しており、こちらもプラスイメージの語が現れた。

2022年の抽出語には、1つめのネットワークとして「大変」「農家」「苦勞」「感じる」「考える」の他、「大変」に「食べる」「深い」の強い共起を示していた。2021年に比べ、抽出語が複数につながっており、「食べる」の語に「体力」「知る」「頑張る」「簡単」が、「知る」が「折れる」とつながっており、弱い共起だが、「大変」と「掘る」「折れる」「土」「見える」「出る」「見つける」と、「大変」と「感謝」「見る」「協力」「たくさん」「方々」「食」とつながっていた。2つめのネットワークとして、「出来る」「普段」「学ぶ」「貴重」「本当に」「少し」「機会」「活動」「作業」「行う」が、弱い共起であるものにつながっていた。さらに、3つめのネットワークとして、「経験」「泥」「足」「昨年」「今年」「入る」「良い」「楽しい」がつながっており、プラスイメージの語が複数つながっていた。2021年に比べ、「重労働」の表現や、「農家」と「泥」につながりは無かった。また、2021年には、表2の抽出語でも2位に位置付けられていた加賀蓮根の「加賀」という固有名詞が、「農家」や「貴重」の語に続く形で記述されていたが、2022年には無かった。逆に、2022年記されているが、2021年には無い語として、「深い」「考える」「頑張る」「協力」「昨年」「良い」などがあつた。

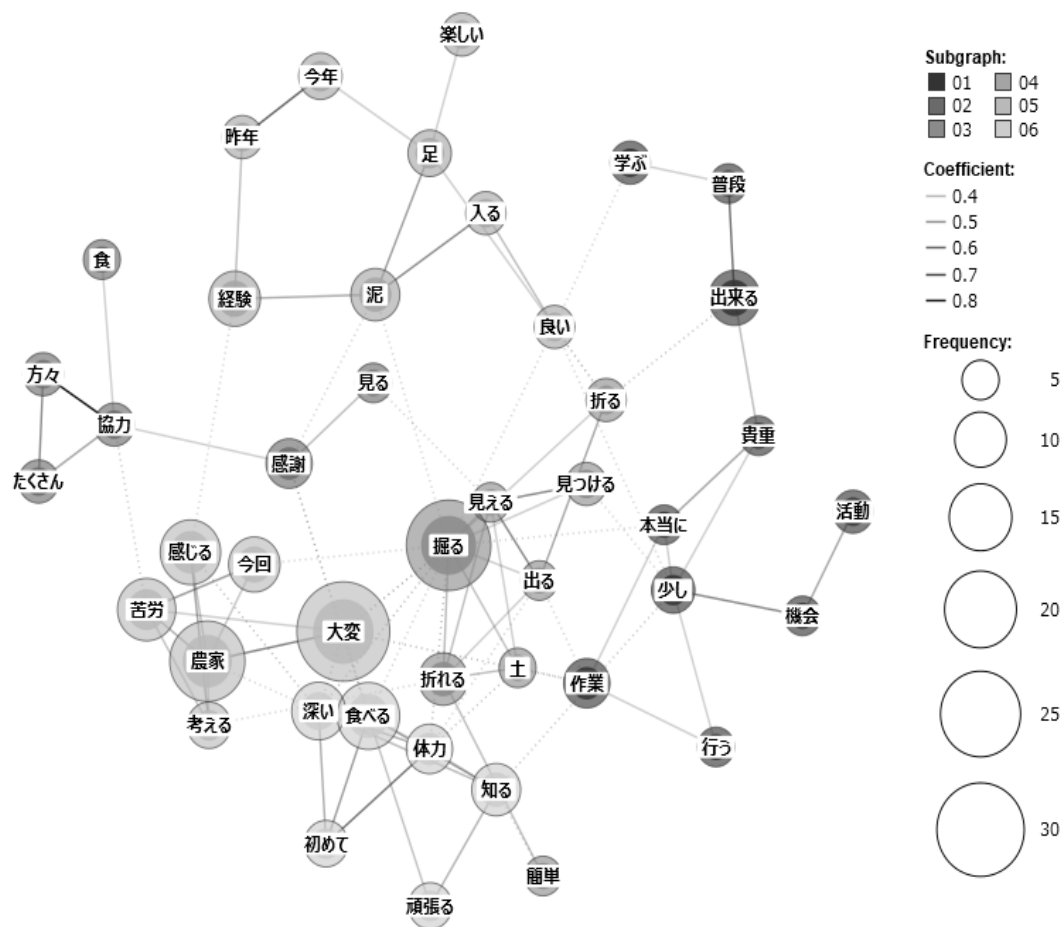


図3 2022 抽出語共起ネットワーク

そこで、これら6語がどのような記述表現で書かれたものか、具体的記述内容をみるとした。「深い」は、主に蓮根畑の沼の深さについて示すものが7件、今回の体験における感想の深さを示すものが4件であった。「考える」は、農業そのものや農家の方々の作業について、「考えたことが無かった」とか、これを機会に「初めて考えた」、今回の体験で「考えるようになった」など、体験を通じた思考表現であった。「頑張る」は、今回の体験を生かして次の行動につなげたいとする表現がみられた。「協力」は、農家の方々による協力のおかげとする感謝表現が3件、友人と協力して収穫できた喜び表現が3件であった。「昨年」は、「昨年」に比べ今年の体験が楽しかったとか、なかなか見つけれなかったなど、初めての経験ではなく2回目であることで比較分析できているコメントが2件、また、ゼミナールの友人から昨年の様子を聞いて知っていたが、今回の体験で初めてだった2年生の表現が1件あった。「良い」は、その日の天気が非常に良かったことが2件、今回の体験が良かったとする表現が3件、そして土や泥を通じて蓮根の鮮度の良さを表現したものが1件であった。

5. まとめと考察

学生にとって、勤労観や職業観をより具体的に構築するための学習プログラムは、成年年齢が引き下げられ、高等学校在学中から選挙権や契約を行えるようになった現在、自己の適性や学びのきっかけとなる機会をもう少し設けてみる必要がある。

本研究では、そのような学生のキャリア形成における機会の一つとして農業体験を取り入れ、体験後の学生が感じた自由記述回答から分析できることでキャリア形成に何等かの影響があるのではないかと検証してきた結果、いくつかの点が明らかになった。

一つには、蓮根農業体験は、人生で一度あるかないかの貴重な体験であるため、教育的価値が大きかったことである。学生らにとって、これまでの学校教育において稲作体験はあるものの、蓮根における農業体験は未知なる体験であった。2021年で、1人だけ小学校時代に経験している学生がいたが、ほとんど憶えていないということで、ほぼ全員が初めての体験であった。学生にとって、蓮根という一つの農作物を収穫することがこれほどまでに大変で苦労の末に自分の口にできていることに非日常的感觉と農家や食への感謝の心がこの体験によって育まれた。また、収穫の喜びが、自己達成感や目標達成感に繋がり、自尊感情を高められる一つの機会となり得ることができたようである。自己開示性の乏しい学生らが、泥まみれになりながらも生き生きと笑顔で楽しむ姿には、成功体験とも取れる達成感が得られることもあると言える。

二つには、農業という仕事の実態を学ぶことで、農業従事者にはなれないものの農業に関連した仕事に就くことへの興味関心を沸かせる一つの契機になったことである。学生らの多くが、業種でも職種でも農業関連の仕事にほとんど興味が無かったが、幾人かの学生は、こうした経験を機に農業を応援したり、農業に関わる業種を選んだりする機会が増加

することとなった。

三つには、これからのキャリア形成や自己の適性を考える上で、例えば朝の早い仕事、天候に左右される仕事、体力や忍耐力を要する仕事、チームワーク力を重視する仕事など、例えば事務職という職種を希望するとしても、与えられた仕事をこなしていくためには、協力し合い達成していくことが求められるなど、農業体験を通じて自己適性を自ら考える機会を設けることができた。

しかしながら、こうした学習プログラムには幾つかの課題がある。それは、農業体験が一過性のものではなく、継続したプログラムになることの必要性である。本研究でも、当初生育の観察から日常的に育て、収穫までを一貫して学生自らの手で担う取組みが議論されていた。残念ながら、コロナ感染状況を鑑みながら活動内容を一部変更することとなったため、やや断片的なプログラムとなってしまったが、今後継続的な活動における検証が必要である。また、他の農作物と比較検証することができていないことも課題である。学生にとって望ましい内容の検討が必要となるため、今後の課題としたい。

本研究を進めるにあたり、JA金沢市加賀れんこん部会長北博之氏をはじめJA金沢市加賀れんこん部会生産者の皆様、JA金沢市職員の皆様、金沢星稜大学女子短期大学部手塚ゼミナール卒業生（1期生有志）、2022年度手塚ゼミナール2年生20名および手塚プレゼミナール1年生16名にこの場をお借りして御礼申し上げます。

脚注

- (1) 文部科学省（2004）「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために～の骨子」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801.html
- (2) (社)雇用問題研究会編（2004）『職業研究2004』（社）雇用問題研究会43
- (3) 森山廣美・水原道子・上田知美（2018）「短期大学におけるインターンシップ－実態調査から見えるもの－」四天王大学紀要65.p.467
- (4) 森山ら（2018）.同掲.p.481
- (5) 松元理恵子・千葉しのぶ・改元香（2017）「郷土料理に接する経験が女子短大生の思考や行動に与える影響－自尊感情とキャリア形成に視点をあてて－」鹿児島女子短期大学紀要52.p.140
- (6) 寺田盛紀・イーサンミン・石嶺ちづる・清水和秋（2015）「大学生の職業的資質形成に関する国際比較研究－日本・アメリカ・韓国・ドイツの4大生と短大・職大生の比較－」生涯学習・キャリア教育研究11.p.44-45
- (7) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2009）『キャリア教育体験活動事例集』実業之日本社によれば、事例2広島県庄原市立西城小学校5年生で稲作を体験する事例がみられる（p.16）ほか、山口県萩市立越ヶ浜中学校（2013）「地域素材を生かしたキャリア教育～地域を知り、体験から学ぶ将来への道のり～」、宮城県多賀城市立東豊中学校（2019）の「農業体験学習」、高等学校では農業高校などの専門学校の他、神奈川県立金井高等学校（2019）「地域と連携した取組み」、滋賀県にある私立光泉カトリック高等学校（2021）「農業体験活

動田植え」など普通科においても多数報告がみられる。

- (8) 鈴木善次監修朝岡幸彦ら編著（2007）『食農で教育再生－保育園・学校から社会教育まで』農山漁村文化協会.p.17
- (9) 農林水産省（2021）「第4次食育推進基本計画」p.9
- (10) 抽出語のうち、「蓮根」、「収穫」、「体験」、「思う」の語を除いた。

引用文献・参考文献

- 小泉令三・古川雅文・西山久子（2016）『キーワードキャリア教育－生涯にわたる生き方教育の理解と実践－』北大路書房
- 中蔦剛（2021）『若者の曖昧な進路選択とキャリア形成－とりあえず志向の実証的探究－』晃洋書房
- 手塚貴子（2022）「地域の伝統野菜を題材にした学生向け学習事業の一考察－学習前食意識アンケート調査分析を中心に－」日本学習社会学会年報18.97-103
- 手塚貴子（2021）「地域協働の視点で取り組む学生の商品開発－加賀野菜の応援活動事例を題材に－」星稜論苑50.1-10
- 野田知子（2009）『実証 食農体験という場の力－食意識と生命認識の形成』農山漁村文化協会
- 宮崎冴子（2008）『キャリア形成・能力開発「生きる力」をはぐくむために』文化書房博文社